



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 英国エージェントH・P・シャストリの諜報活動：東京・上海・ロンドンで活躍した「情報ブローカー」付・インドで押収された大川周明の英文書簡とその翻訳    |
| Author(s)    | 橋本，順光   |
| Citation     | 大阪大学大学院文学研究科紀要．2020，60，p. 77-106  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/76052">https://doi.org/10.18910/76052</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 英国エージェント H・P・シャストリの諜報活動

——東京・上海・ロンドンで活躍した「情報ブローカー」——  
付・インドで押収された大川周明の英文書簡とその翻訳

橋 本 順 光

### 序 エージェントとグルを演じた「情報ブローカー」

1917年3月5日付の東京朝日新聞朝刊に、以下のような広告が掲載されている。

教授 英会話、英語演説、英文学、波斯語、サンスクリット語、印度語、  
右経験ある外国人担当教授す 希望者は本郷菊坂町菊坂ホテル内シャストリ迄

「菊坂」と誤記しているが、住所の菊富士ホテルは、多くの作家や学者が寄宿したことで知られる本郷の下宿屋である。そんな多士済々の群像劇を描いた近藤富枝によれば、後のインドの首相シャストリーも住んでいたと記されているが<sup>1)</sup>、彼はラール・バハードゥル・シャーストリーではない。こちらのシャストリは、ハリ・プラサド・シャストリという、ヴェーダ哲学の研究者であり、ヨガの師であった。1916年10月頃に訪日し、1918年まで主に東京に滞在した。この広告は、来日して半年足らずで掲載されたことになる。同じ文面が3月7日と11日にも登場しているが、シャストリがどういった意図をもっていたのか、いったい希望者が応募してきたのかどうかはよくわかっていない。「英語演説」が教授できることを謳っているように、シャストリは日本語からペルシャ語まで多言語を操る該博な知識人であったうえ、弁と社交に長けていたので、こうした個人広告に頼る必要がなかったはずである。実際、短い日本滞在の間に、高楠順次郎に招かれて帝国大学で講義を行い、早稲田大学のギターソサイチーで、講師を務めるまでになっていたからである<sup>2)</sup>。

1) 近藤富枝『文壇資料 本郷菊富士ホテル』（講談社、1974）、p.1.

2) 「早稲田ギターソサイチー成る」『早稲田学報』1917年1月号、p.13を参照。早稲田では1916年11月18日の印度哲学開講十年記念大講演会でも、村岡典嗣や木村龍寛らとともに登壇している。サバルワルや大川周明、後述のリシャール夫人も出席したという。「印度学会近況」『早稲田学報』1916年12月号、p.14を参照。その際に、会の中心人物であった武田豊四郎が結成した一如洞は、梵我一如だけでなく、たぶんに神智学や万教帰一を意識した命名であろう。このようにシャストリ

こうしたシャストリの足跡は、インド学者である前田専學の一連の研究に詳しい。1987年に前田は、シャストリがロンドンで創立した「内我に関するヨーガ」(Adhyatma Yoga)のセンターであるシャーンティ・サダン(Shanti Sadan)を訪れており、関係者に取材して、センターでの資料に基づき、シャストリの生涯と足跡を詳しく紹介している<sup>3)</sup>。それによれば、シャストリは1881年にネパールの国境に近いインドのバレーリーという町で生まれ、ヨガの修業とサンスクリット哲学の研究にいそしんだ。日本に来たのは、師によって、帝国主義に邁進する日本をいさめるためであったという。この地で、シャストリは小川八千代に出会い、生涯の伴侶としている<sup>4)</sup>。彼女を含む人々との交流については、俳句などの紹介をまじえた私的な滞在記として、*Echoes of Japan 1916-1918* (1961)を刊行しており、これも前田によって『こころに響く日本』と題して翻訳されている。その後、1918年に、シャストリは、前田の記すところによれば、孫文に招かれて上海へ赴き、彼のヨガの師となったという。上海には1929年までとどまり、その後、シャストリは英国へ渡り、ロンドンを終の棲家と定めたのである。

実のところ、シャストリは英国政府のエージェントであった。そのことを最初に指摘したのは、歴史家のリチャード・J・ポプルウェルである。一次大戦での苦戦をはさむ間に、過熱化するだけでなく、広く海外にネットワークを形成していったインドの独立革命運動に対して、英国は一大諜報網を作り上げてそれを抑え込もうとした。この画期的な研究書によれば、1916年10月にシャストリは、「エージェントP」として「Q」とともにインドから派遣されたという。インドの諜報部門を束ねていたデイヴィッド・ペトリが白羽の矢を立て、報告は、二人を管轄していた横浜の副領事チャールズ・デイヴィッドソン、それに東京の英国大使カニングム・グリーンに逐一送られることになった。「P」ことシャストリの活躍は目覚ましく、「教授」ということ立場を生かして日本の主要なナショナリストたちと緊密な関係を築き、英国大使たちは、インドのナショナリストたちへのシンパシーが極めて強いことに驚くことになる。そして1916年の末には、PとQが強制送還を免れた謎のインド人はR・B・ボースであることを発見し、日本政府への不信感を募らせることになったという<sup>5)</sup>。

ポプルウェルの重点は、対インド政策であるため、これ以上、エージェントPことシャストリについての言及はない。膨大なPによるレポートは、英国の公文書館に眠ったまま、

---

は、あくまでギーター・サイターの講師であって、早稲田大学の教授ではなかったが、そうした誤解を本人が否定することは少なかった。同様に上海滞在中には、オクスフォード大学哲学博士として知られるようになっている。林淇「哈同花園の人與事」『傳記文學』, 78巻, 2001, p.60-61を参照。

3) 前田専學「H・P・シャストリーと日本」『インド哲学と仏教』(平楽寺書店, 1989)を参照。

4) 彼の妻については、前田専學が初めて解明したといえるだろう。詳しくは「ロンドンにヴェーダンタを一あるインドの思想家と日本女性」『東方』4, 1988参照。

5) Richard J. Popplewell, *Intelligence and imperial Defence: British Intelligence and the Defence of the Indian Empire, 1904-1924* (London: Frank Cass, 1995), pp.278-279.

これまでほとんど注目されることがなかった。以下、シャストリの諜報活動の一端を、公開された資料と対照させながら、その生涯を略述してみたい。

## 1 英国エージェント P として東京へアジア主義運動の監視

シャストリの前半生については、本人が語る以外に信頼できる資料はほとんどない。ただし、英国に渡ってからのシャストリがヨガの弟子たちに語った後半生も、およそ信頼できるものとはなっていない。語っているうちに弟子と師とのあいだでますます誇張され、伝説のようになっていった彼の生涯は、1956 年の英国の仏教雑誌に掲載された追悼記事から顕著にうかがえる（図 1）<sup>6)</sup>。それによれば、シャストリはヨガを広く海外にも教えるよう、師か

### Hari Prasad Shastri

PETER HALIDAY

Dr. Hari Prasad Shastri, who passed away in great peace in the early morning of 29th January, was a Brahmin, a renowned scholar of Sanskrit and Vedanta philosophy, and a traditional teacher of the practical Yoga of realization. He accepted the mandate of his own Guru to spread the light of Yoga abroad, and in 1916 founded a centre in Tokyo, where he was Professor of Indian Philosophy at Waseda University. While in Japan, he was invited to read from and explain the Bhagavad Gita to the present Emperor, then Crown Prince. Some years later he founded



Dr. Hari Prasad Shastri

another centre of Yoga in Shanghai, and among his circle of friends and pupils was Dr. Sun Yat-Sen, founder and first President of the Republic of China. In 1929 Dr. Shastri came to this country and within a few years had founded Shanti Sadan, the centre of Adhyatma Yoga in the West. Here he lectured on philosophy and religion to the public, and at the same time trained a group of pupils to continue the work of Shanti Sadan when he should lay aside his body. Dr. Shastri translated and published many of the Vedanta classics, some of which are now available to readers in this part of the world for the first time. His authoritative translation of the holy epic *Ramayana* is being published with the help of the Government of India. His spiritual genius lives on in these publications and in the work of Shanti Sadan which he has founded in a firm tradition.

*The Middle Way*

25

図 1 晩年のハリ・ブラサド・シャストリ  
シャストリの写真は極めてまれである

6) Peter Haliday, "Hari Prasad Shastri", *Middle Way: Journal of the Buddhist Society*, 31-1, 1956, p.25. 前田が利用したのは、このハリデイが残し、編集した手記である。

ら命じられて、1916年に訪日したという。東京でヨガのセンターを作り、「早稲田大学ではインド哲学の教授となり、昭和天皇の皇太子時代に、その前でバガヴァッド・ギータの購読と講義」を求められたとある。その後、上海にもヨガのセンターを創設し、その「友人かつ生徒の一人に孫文」がいたという。英国を訪れたのは1929年のことであり、そこでヨガを教え、ヴェーダンタ哲学の書を翻訳し、インド政府の援助を受けて叙事詩ラーマヤーナの翻訳にも従事したというのである。追悼記事ゆえに、功績を過大評価しがちなところはやむを得ないとはいえ、この経歴が疑わしいのは明らかだろう。実際、シャストリは早稲田大学の教授ではなく、管見の限り、皇太子に御進講した記録は見つかっていない。孫文がヨガを習っていたというのも、おそらくは、自身が教えるヨガの権威を高めるための箔として吹聴したのがいつのまにか定着したように思われる。

ただし、英国でインドのヨガを教えるための方便というだけでは片づけられない記述が前田の論文に見られる。前田も注記するように、シャストリが来日した1916年頃の東京は、いわゆる中村屋のボースことR・B・ボースなど、多くのインドの革命家や志士たちが訪れ、内外の運動家と連携や連絡を行う場であった。そんななか極めて親英的で、インド民族運動のもつ「暴力の哲学」に反対していたシャストリは、そのシャーンティ・サダンにある手記によれば、東京のインド人から「たえず見張られ、かれの手紙は警察によって奪われて、インドの革命の志士に渡され」という（前田, 1989, p.812）。それだけにとどまらず、シャストリは脅迫や嫌がらせにあい、なかでも東京外国語大学でヒンドゥスターニー語を教えていたアタル（H. Atal）から、R・B・ボースに協力し、千円を払わなければ暗殺するとまで脅かされたという。ヨガに関心があった大隈重信を訪ねた際にも、その親英的な態度ゆえに日英同盟の是非をめぐるちょっとした行き違いとなり、早稲田大学を辞めることになったとまで記している。友人の大川周明に頭山満を紹介された時も、その反英的な立場に共感できず、こうした盲目的な愛国者に囲まれて、ますます状況が切迫したという。そんな中、偶然、東京の丸善で孫文に出会い、丁重に自宅に招かれて、彼から中国行きを進められたというのである。

自伝における自己弁護や正当化は珍しいものではないが、ここでシャストリは、自身が積極的に関わっていた諜報活動をまったく正反対の立場から記して、被害者のようにふるまっていることがうかがえる。そもそもシャストリは、ボースら革命運動家を監視し、言葉巧みに彼らの懐にはいつて書簡を抜き取り、ノートなどを書き写して報告するのが主な仕事であった。あたかも周囲の圧力によって早稲田大学を辞して、孫文の手助けを受けて上海に渡ったかのように記しているが、東京同様に、ボルシェビキやインドの革命家が多く活動していた当時の上海への渡航が、諜報活動と無縁であったとはおよそ考えられない。そもそも政府と周囲の圧力で、窮地に陥っていたのは、シャストリを脅迫したというアタルであった。シャ

ストリはアタルと折り合いが悪く、例えば、1916 年 11 月に食事を共にした時の印象として、「アタルはインドのナショナリストにシンパシーを抱いており、彼の学生の中にもそのように話すものがいた」と、必要以上に要注意人物であるかのようにレポートで記している。もっとも報告を受けた副領事のデイヴィッドソンは同意せず、「アタルはどちらかといえば臆病者なので、革命思想に表立って賛同するのは考えにくい」と一蹴している<sup>7)</sup>。ただその後のアタルは、英国政府への協力を陰に陽に周囲から脅迫され、シャストリの出国後ではあるが、ついに自死している。その遺書には、そうした脅迫と嫌がらせが切々と記され、その結果、事件はインドへの英国の横暴を示す一例として大きく報道された<sup>8)</sup>。シャストリは、自身が嫌い、英国への協力を強制されて板挟みになって自殺したアタルを、むしろ彼の方が加害者であるかのように作り替えたのである。

シャストリは、在日インド人社会にまたたくまに人脈を築き上げ、同時に鍵となる日本の要人にも次々に接触している。調査の目的でおそらく最初に接触した日本人の一人が大川周明であったと思われる。大川の『印度に於ける国民的運動の現状及び其の由来』（1916）は、つとに英国政府でも話題となっており、デイヴィッドソンは、1916 年 12 月 20 日付のグリーン大使に宛てた書簡で、この著作の抄訳も一緒に送っている。デイヴィッドソンは、インドに行ったことのない大川が詳細に記述していることから、ボースら在日インド人が情報や書籍の提供に協力したのは間違いないとして、彼らの思想が影響を与えることを危惧したのである<sup>9)</sup>。シャストリは、早くも来日して二週間ほどの間に、「大川氏を二回訪問、姉崎[正治]と高楠[順次郎]は来宅」し、「早稲田大学から哲学について講演依頼」があったと誇らしく報告している<sup>10)</sup>。以降、シャストリは大川の信用を得て、人脈を大きく拡大していく。アジア主義者であるだけでなく、大川と神智学的な信条でも共感するところが多かったリシャール夫妻はその一例だろう<sup>11)</sup>。シャストリは、夫ポール・リシャールが「ヒンドゥーの經典や宗教、それに哲学に詳しいふりをしているが、浅薄な知識」でしかなく、「彼がヴェーダ哲学と背称するものはおよそインドの学者には受け入れられない」と批判しつつ、リシャール夫人とともどもその反英思想が大川ほか日本の青年たちに影響を及ぼす危険性を強調してい

7) FO 371/3063, "Report by Agent P. November, 1916" およびベトリー宛て 1916 年 11 月 27 日付書簡を参照。

8) 例えば 1921 年 6 月 16 日付『読売新聞』の「外語教授印度人アタル氏時事に憤慨して自殺す」を参照。アタル事件は、しばしば反英プロパガンダに援用され、後に映画『進め独立旗』でも、在日インド人が立ち上がる契機として描かれている。こうしたアタル事件をめぐる日英の交差については、しかるべき論考が必要だろう。

9) FO 371/3064, グリーン宛て 1916 年 12 月 20 日付書簡。

10) FO 371/3063, "Report by Agent P. October, 1916."

11) 詳細は、吉永 進一「大川周明、ポール・リシャール、ミラ・リシャール—ある邂逅」『舞鶴工業高等専門学校紀要』（43）、2008 を参照。

る。その一人として挙げたのは、早稲田の学生であり、早稲田のギター学会創立の際に学生代表で挨拶もしていた平沢哲雄であった<sup>12)</sup>。

大川自身についての興味深い報告は、離日前のシャストリに語った大川がインドに関心を抱くようになった経緯だろう。それによれば大川は、1902年か1903年、まだ10代の学生の時に、学校へスワミ・ナラヤン（Swami Narayan）が講演に来たという。その宗教者は、しかし、宗教のことはほとんど話さず、もっぱらインドでの英国の統治がいかに過酷であるかを熱っぽく語り、大川は深く共感したという。そこからひいては大学でインド哲学を学ぶことになり、それが縁で東京外国語大学の講師だったバラカトゥラーと親しくなったという。大川はしばしば図書館でグプタに話しかけられた縁を自伝などで記しているが、シャストリに語ったところでは、あるレストランでたまたまグプタと出会い、それから政治や文学について語り合うようになったのだという。タクールことR・B・ボースを紹介されたのも、グプタを介してであった<sup>13)</sup>。大川は、インドの独立が必要だという持論を展開したあと、シャストリと連絡を取り合うことを約束したというが、ここまで私的なことを語りながらも、その後、二人の接点はなかったようだ。1919年、大川が上海に北一輝を訪ねた頃、シャストリも上海にいたはずだが、再会の記録は見当たらない。大川も、管見の限り、シャストリらしき人物に言及することはなかった。

しかし、シャストリの報告により、ボースやグプタを始めとする革命運動家たちとの関係ゆえ、インドのナショナリズムを刺激しないよう、大川の書簡や行動を英国政府はかなり注意深く観察するようになっていた。1917年4月、大川はインドの総合誌『モダン・レビュー』の編集部宛てで、日本のアジア主義に関する英語の論考を投稿するが、書簡は英国政府によって押収されてしまい、その論文が公表されることはついぞなかった<sup>14)</sup>。この大川の英文論考「日本における汎アジア主義の精神」は、実のところ英語圏の新聞で批判的に紹介されたアジア主義者の論説をそのまま転用したところが多く、お粗末な内容ではあったが、引用されたアジア主義者たち、例えば長瀬鳳輔などは、以降、英国政府によって要注意人物として、その論調を監視されるようになったのである。大川は、タラクナート・ダスとされるインド人の翻訳として『国際間に於ける日本の孤立』（1917）を刊行するが、これもシャストリに内報され、内々に出版許可を得て私費印刷としたことや東郷平八郎が本書を海軍に推奨したためよく読まれていることなど内実を暴露されている。タラクナート・ダスは、シャス

12) FO 371/3068, "Report by Agent P. August 28, 1917." 平沢は後に『直現芸術論』（1922）を著し、序文でポール・リシャールと過ごした日々に触れ、リシャールを経由して影響を受けたと思われる神智学的な共感覚について論述している。なおシャストリは、リシャール夫人が平沢に横恋慕しており、平沢が困惑していたというゴシップをわざわざ報告書に記している。

13) FO 371/3424, "Secret P. April 2, 1918."

14) この書簡については、付属資料として原文と訳文を注と共に掲載した。

トリが信頼関係を得ることができた極東地域でのインド独立運動における最重要人物の一人であったので、シャストリの大川に関する報告が唯一直接の原因ではないかもしれないが、本書が日本政府によって流通を差し止められたのは、それから 10 日後のことであった<sup>15)</sup>。

このようにシャストリは、東京のアジア主義者集団やインド人社会に巧みに入り込み、その情報を逐一、英国政府に報告し続けたものの、ほとんど怪しまれることがなかった。当時、東京に在住のインド人は多かれ少なかれ、監視の対象であったので、その域を出ることはなかったように思える。例外的に菊富士ホテルで同宿だった大杉栄との交流が注意を引いたことが挙げられる。ただし、1918 年に「「シャストリー」（無政府主義者トノ評アル者ニシテ早稲田大学哲学講師タリ）」と記されているものの、同じく大杉が親しくしていた「「ポール・リチャール」（印度革命ニ同情セルモノ）」とはおよそ異なっている。「無政府主義者」という評からも、自身や信条らしきものをほとんど語ろうとしなかったことがうかがえよう<sup>16)</sup>。

そんなシャストリの表の顔は、リシャルと親しく行き来していた作家の秋田雨雀の日記に活写されている。1916 年 11 月 15 日というのでまだ来日から一か月くらいのころのこと、雨雀がリシャルを訪ねた際に、

印度の大学教授、ミスタ・シャストリイにあう。この人は早稲田で“On athma”の講演をした人。「ヨーガ」の説明を聞いた。椅子に腰かけながら禅をやっていた。ペルシャ語ができる人で、ペルシャの詩を絶賛していた<sup>17)</sup>。

と記録している。おそらくこうした学識とヨガのゆえに、不審に思われることがなかったであろう。雨雀はエロシェンコと友人であるなどエスペ란ティストであり、バハイ教にも関心があったので、関連の人物についてシャストリは報告をしているが、雨雀についても大杉栄についても、今のところシャストリの記録は見つけられていない。その点で興味深いのは、菊富士ホテルに滞在していた折、「ミナイ」という刑事が金の無心にやってきて、快く貸し与えたところ、「反英的なインド人を見つけても、公の場でなければ攻撃せず、むしろ積極的に話題に加わるように指示されている」と教えてくれたという逸話である。この刑事が大杉栄へとの関係を探りに来たのかどうかは不明だが、この報告に対してデイヴィッドソンは「P を引き込もうとしていると考えられる」と付記している<sup>18)</sup>。

15) FO 371/3068, “Agent P. July 21, 1917.”

16) 近代日本史料研究会『特別要視察人状勢一斑 第八』（明治文献資料刊行会, 1957-1962）, p.69.

17) 『秋田雨雀日記 I』（未来社, 1965）, p.80.

18) FO 371/3422, “Secret. Agent P. December 23, 1917”. 菊富士ホテルで育った創業者の三男によれば、大杉をお供するように尾行して周囲とも談笑する関係になっていた本富士署の刑事に、薬袋（みたい）という「親しみやすい小父さん」がいたという。したがってシャストリが誤記したか、変名を使っ

このように日本の官憲との接触は時折、あったものの、それ以上、注意を引くことはなかった。したがって、シャストリが東京で孫文に遭遇したというのは極めて疑わしいと言わざるを得ない。東京滞在中の孫文は、尾行のみならず、厳重に面会者をチェックされており、もしシャストリが自宅に招かれたとすれば何らかの監視記録が残ったはずであるが、それらが今のところ見つかっていないからである。こうしてシャストリは、1918年4月13日、東京駅を出発して、上海へと旅立った。当時の在日インド人の例にもれず、移動中は尾行され、記録されはしたものの、旅券の記載によれば当年三十五で、「丈五尺四寸色黒肥満」の「シャスター」は、「日本語二通」じ「容疑ノ言動ナシ」ということで長崎から何事もなく出国したのであった<sup>19)</sup>。

## 2 上海でアジア主義者で神智学徒の夏士屈里へーコミュニズム運動の調査

ドイツから資金を得たガダル党などインドの革命団体が、日本、中国、メキシコなどを通して武器と宣伝文書を送っていたことが判明して以来、インドの諜報部はインド以東の東南アジアや中国に目を光らせていた。1916年の段階で、駐日公使のグリーンと駐中公使のジョーダンが会談し、インド諜報部のデイヴィッド・ペトリーを上海に駐在させ、英国の対ドイツインド支援を調査する諜報センターを設立している<sup>20)</sup>。ペトリーは、1918年4月に『アジア主義運動』という大部の報告書を作成しているが、日本の部分は、多くPことシャストリのレポートを参照して書かれている<sup>21)</sup>。そのシャストリは同時期に上海を訪れ、引き続き激動の1920年代をそのまま滞在し続けることになる。その後、英国に難なく移住したことを考えれば、日本と中国での滞在は、何らかの功労だったのではないかという疑問がわこう。

たしかに、上海に渡ってからのシャストリは、Pとして報告を残していない。しかし、例えば、1923年2月に、上海を訪れた要注意人物であった詩人のエロシェンコに「インド人シャスター」が再会しているのは、何らかの策謀を想像させよう<sup>22)</sup>。たしかに今のところでは、

たかしたのかもしれない。なおシャストリが住んだ37番室に、1926年に入居したのが直木三十五であった。詳しくは羽根田武夫『鬼の宿帖』（文化出版局、1977）、p.73ほかを参照。

19) 『各国内政関係雑纂／英領印度ノ部／革命党関係（亡命者ヲ含ム）第三卷』（1918/03/15 - 1918/06/27）、アジア歴史資料センターレファレンスコード：B03050976700

20) Richard J. Popplewell, *Intelligence and imperial Defence: British Intelligence and the Defence of the Indian Empire, 1904-1924* (London: Frank Cass, 1995), p.269.

21) FO 371/4242, David Petrie, "The Pan-Asiatic Movement" April 2, 1918.

22) 藤井省三『エロシェンコの都市物語』（みすず書房、1989）、pp.187-188。ほかにもシャストリは、タゴールが1924年4月に上海を訪れた際にしばしば歓迎の演説を行っているが、これも調査の一環かと思われる。Anonymous, "Rabindranath Tagore Preaches Union of Asiatics and Disparages Western Materialism", *China Weekly Review*, May 3, 1924, p.324を参照。実際、岡村寧次大将の1924年4月14日の日記に「午後七時東亜西樓のシャストリ夫妻（夫人は日本人）の小宴に臨む。一〇時半まで飲み且談ず」とあり、「シャストリ氏よりタゴールの日本人と談じたき旨の非公式希

シャストリがエージェントして働いたことを示す記録は見つけられていない。むしろ上海でのシャストリはアジア主義団体に加わり、上海での神智学協会の会長に収まるなど、積極的にアジア主義運動に参入していく。神智学協会のインド本部は、アニー・ベサント会長がインドの自治を主張して以来、英国はこの団体の友愛主義に警戒心を強く抱くようになっていた。東京では黒龍会を始めとするアジア主義団体の会員と近しくなって、英国に報告を送りはしても、そういった団体には加入しようとしなかったのと好対照である。そんな団体のみならず、アジア主義の流布が反英運動を連鎖的に引き起こす可能性を警告した報告書が英国政府で回覧された後、シャストリはアジア主義を標榜する団体に参加したのである。この場合、情報収集だけでなく、運営に関与することでアジア主義的な運動を牽制しようとしたと考えるのが妥当だろう。少なくともそうでない限り、日本人女性を妻としたインド人男性が戦前の英国へ移住し、そのまま永住できたことを十分に説明できまい。例えば、シャストリが支部長になった際に特に発展したベサント・スクールは、アニー・ベサントからインド自治運動という反英的で政治的な要素を抜き取り、女子教育に特化することで神智学協会を手触りのよい友愛の共同体として脱色化することに成功したともいえる<sup>23)</sup>。

アジア主義団体も同じである。1924年創立の上海亜細亜協会は、日本人医師の頼宮寛を会長とし、中英の両言語併記の『大亜雑誌』を創刊したが（図2）、そこでシャストリは、アジア主義に類した言葉を使用こそすれ、反英的な扇動とは無縁にあくまで東洋の平和といった空虚な内容を繰り返すのみである。それは1924年7月、アメリカの排日移民法に抗議した亜細亜協会の講演会によく表れている。会長の頼宮は、「亜細亜民族の覚醒と団結を目指す」と題して演説を行い、フィリピン独立の志士カラムバカル（Kalambakal）の演説が、「アメリカの新移民法と亜細亜協会の天職」であったのに対し、「インド独立の志士で元早稲田大学講師のシャストリー博士」は、「汎亜細亜運動の意義」であったという<sup>24)</sup>。およそ「独立の志士」からぬ穏やかで抽象的な題目で、扇動や挑発と対極の位置にあったことが想像できよう。1923年から寄稿し始めた『ミラーズ・レビュー』などの英字誌での活動も同様といえる。約一年後には早くもエディターの一人におさまリ、アジア主義について執筆するも、警戒されるほどの内容を書くことはない。アジア人のアジアや、西洋の物質主義批判、東洋の精神主義といったキーワードをちりばめつつも、平和と理想の確認という穏当な主張に終

---

望あり」というのは、排日移民法施行前だけに日本の軍部の本音について探りをいれた可能性がある。船木繁『支那派遣軍総司令官岡村寧次大将』（河出書房新社、1984）、p.67を参照。なお同頁4月17日の日記に「午後六時詩聖タゴール氏歓迎宴に臨む」とあり、「流石に詩人タイプにてギリシャの昔を語る劇に出てきそうな人なり」と感心しつつも、「八時半終り撮影をなし次で講演ありしも予は出でざりし」というため、具体的に誰とどのように談じたかは不明である。

23) 中国における神智学の移入の歴史としては、以下のサイトを参考にした。

<https://www.theosophy.world/encyclopedia/china-theosophy>

24) 南堀英二『奇跡の医師』（光人社、2010）、pp.137-138。

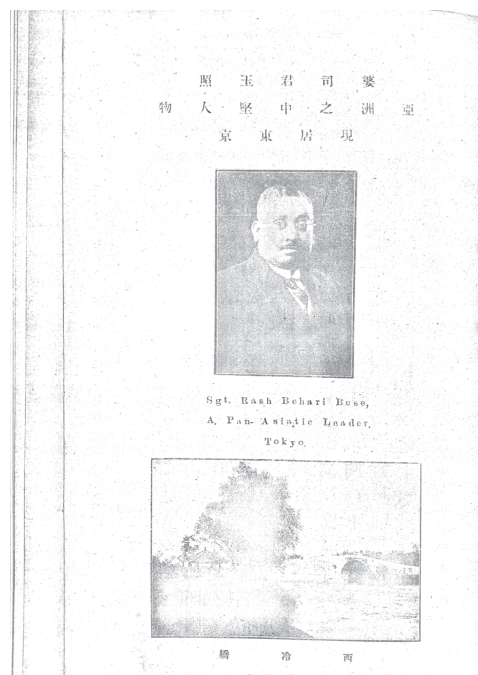
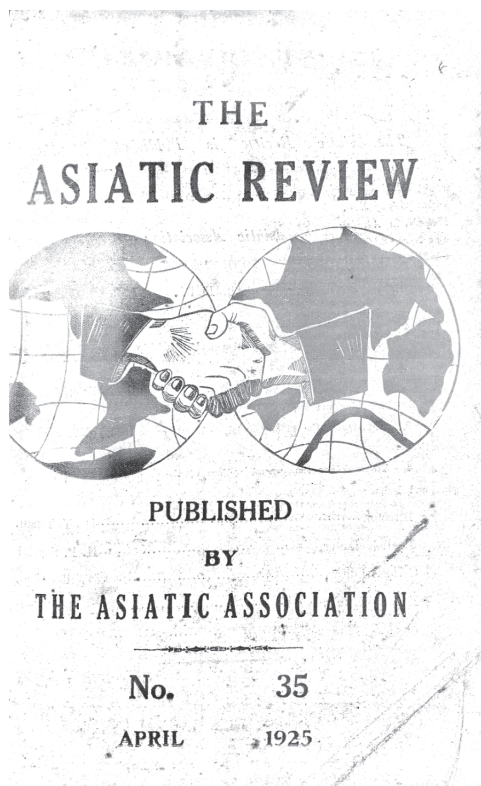


図2

左 『大亜雑誌』 1925年4月号英語版表紙

右 『大亜雑誌』 1925年4月号口絵

R・B・ボースがアジアの「中堅人物」として掲載されている

始している。同誌に務めている間に、インド独立運動やボルシェヴィズムについて多くの情報を得ると同時に、署名記事の題目をおとりのようにして、要注意人物からの好感を手に入れ、接触を試みたのかもしれない。

実際、そんな追従にも似た言辞が残っている。1919年、日本の雑誌『上海』の本社記念会にて、「印度記者サストリー氏」が、「東洋諸国に於いて真のスピリットを有せるは日本帝国なり日本は宜しく東洋諸国の盟主たるべし」と演説したというのである<sup>25)</sup>。日本語の媒体なので、おそらくは影響範囲が限定的と考えて口が滑ったのかもしれない。同様に、孫文の時と同様、隴海鉄道の件で馮玉祥との関係が近いことが誇張されたのだろう、彼の参謀である「夏士屈里」博士も認めた水虫の薬として、中国の雑誌で勝手に使われている例がある(図3)。いずれにせよ、こうした相手の本音を引き出そうと、へつらいにも似た言葉を重ねたであろうことは、吉野作造の日記からも推察できる。1923年8月4日、吉野が日本人俱

25) 『上海』 1919 (314), p.131.

凡脚趾縫濕氣潰爛均可治愈  
馮玉祥將軍參謀夏士屈里教授  
之經驗

上海江西路四十一號夏士屈里教授  
乃馮玉祥將軍之洋參謀也其來  
函云鄙人曾患脚趾縫中濕氣奇癢  
難堪非用指重擦不能止癢以致潰  
爛試用各種藥膏擦擦不見效及  
試用如意膏擦數次立即見功現  
下十分全愈如尊處無從購買此章  
廉士大醫生  
新發明之皮  
膚專藥如意  
膏可直寄郵  
票大洋六角  
至上海江西  
路六十號廉士  
大醫生藥局原  
班郵  
奉一盒可也

搽用如意膏可以止癢

図3

『良友』1928年4月号掲載の「如意膏」の広告

水虫がこれで治ったという、夏士屈里ことシャストリの言葉が紹介されている

楽部を講演で訪問した際、「大亜細亜協会とやらの支那人印度人は嫌な感を懐かしめらる」といったのは、おそらくこうした言辭があったからではないか<sup>26)</sup>。日本中心主義にはかならない亜細亜主義を批判する吉野に対して、こうした追従は不愉快に違いなかったであろうからである。

上海時代のシャストリが、味方や真情というものがおよそ見定めがたい共同租界にあって、東京時代とは異なる大胆な活動に出ていた記録が日本の公文書に残されている。シャストリが英国へ移住して後、在英大使の松平恒雄が外務大臣に宛てた1933年1月19日付の書簡に以下のような記述がある。

目下当地滞在中ノ印度人文学博士 (D.Lit) 「シヤストリイ」ハ嘗テ久敷日本ニ在リ其ノ後上海ニモ在留シテ同地日本総領事館トモ相当密接ノ関係ヲ有シ居リタル趣ナルガ来英後モ日支問題等ニ関連シ各地ニ於ケル講演等ニ於テ直接間接日本ニ有利ナル啓発運動ニ力メタルコト少ナカラザルモノナリ然ルニ同人ハ共産党関係者トハ特種ノ連絡ヲ有シ居リ同党ノ対日運動等ニ付是迄ニ内報シ来リタルコトモ少ナカラザリシ<sup>27)</sup>

つまり、シャストリは、コネクションのある共産党関係の情報提供を上海の日本領事館にもちかけ、何らかの報酬を得ていたというのである。それが英国に来てからも連絡があり、別添の英文書簡によれば、ベルリンが日本の共産主義者とソヴィエトとの連絡場所になってお

26) 『吉野作造選集』14 (岩波書店, 1996), p.317. この日本人倶楽部での吉野の講演をシャストリは詳しく寄稿している。それによれば、アジア主義運動は非暴力で行われるべきであり、それでこそアジアは文化的に統一されるだろうと述べたという。H. P. Shastri, "Dr. Yoshino in Shanghai", *China Weekly Review*, August 11, 1923, p.353.

27) 『各国共産党関係雑件／英国ノ部 (属領地ヲ含ム) 9. 印度ト「シヤストリー」対日共産運動関係』(1933/01/19), アジア歴史資料センターレファレンスコード: B04013053400

り、反帝国主義同盟のクレメント・ダット（Clement Dutt）が中心人物となって上海経由で日本へ送金を行っているという。さらに上海にいるアグネス・スメドレーを中心にインド人に協力を求めつつ、日本を含めた世界革命を企図しており、すでにドイツのクラウス（H.Crouse）というスパイが日本への潜入を計画しているというのである。

同報を受け取っていた上海の日本総領事である石射猪太郎は、同じ 1933 年 3 月 10 日の書簡で外務大臣に宛てて、たしかにシャストリは、

中国人私立大学ニ教鞭ヲ取ル傍ラ当領事館並ニ在上海内務事務官ニ対シ共產主義情報ヲ提供シ居リタルモノニテ、当時本名ハ当地共産党関係ト相当密接ナル連絡ヲ有セシモノノ如ク、其ノ提出セル共產主義資料ニ依リテ便宜ヲ得タル事少カラザリシ

と、シャストリの共産党関係の情報が有益であり、上海の領事館で活用したことをここでも認めている。ただ一方で、以下のような注意を喚起している。

本名ハ所謂「情報ブローカー」トシテ其ノ生計ヲ営ミ居タルモノニシテ上海在住当時ニ於イテモ単ニ当館関係ノミナラズ当地共同租界工部局警察及英国領事館方面ニモ同様ノ情報ヲ提出シ居タル事実アリ。又時ニ其ノ情報ニ情報策者の潤色有リシコトハ勿論ナリ。

「策者」の脇には強調して点を打っており、シャストリが英国などの他国とも取引をもちかけ、事態を攪乱する恐れがあることを注記しているのである。こうした石射の注記も手伝ってだろう、シャストリが持ち掛けた詳しい続報は知らされずに終わった。確かに上海でスメドレーは尾崎秀実やリヒャルト・ゾルゲと接触しており、Clement Dutt ならぬ Clements Dutt は反帝国主義同盟にいた。したがって Crouse が、ゾルゲの協力者で 1929 年に上海に在住し、1935 年に来日する Max Clausen だったのかどうか、もしシャストリから情報を入手していたならば、ゾルゲ事件が別の形になったのかどうか、もはや知るすべはない。

### 3 ロンドンでグルヘー過去の隠蔽とヨガの指導

ロンドンでシャストリが、同じような共産党の情報を英国政府に持ち掛けていたかは不明である。こうした情報を在英日本の総領事館にもちかければ、英国での滞在に危害を及ぼしかねないことは、十分に承知していたはずなので、生活にも事欠くような事情があったのかもしれない。シャストリを抜擢したペトリーは功績が認められて順調に出世を遂げ、二次大戦中には MI5 の長官にまで昇りつめるが、英国でのシャストリとの交渉はまったくわかつ

ていない。そんな英国に来たばかりのシャストリの状況を想起させる広告が、以下のようにロンドンの新聞に掲載されている。

チャーチ・エンド・スピリチュアル・ミッション  
ファーンバンク・ホール グレイブヒル  
ヘンドン・レーン  
8月20日日曜夜7時  
H.P. シャストリ博士  
講話と透視術<sup>28)</sup>

こうした見世物にも似た透視術を交えつつ、そして孫文の導師であったことや日本の皇太子に講義したことなど極東での華麗な逸話を披露しながら、シャストリはヨガについてロンドンの人々に語り続け、ついには「内我に関するヨーガ」を英国に根付かせたのであった。たしかにそうした功績や、彼の本業ということになっている哲学や翻訳の仕事については、専門家の立場から、しかるべき評価が可能なのかもしれない。ただし、多くの言語を駆使しながら諜報活動に従事し、複数の文化が相克しあうなかを巧みに泳ぎ切ったシャストリの残した文章は、まるで言質をとられることを拒むように空疎な側面が否めない。おそらくは類まれな才能があったにもかかわらず、彼の生涯はいみじくも石射が名付けた「情報ブローカー」の域をでなかったように思えるのである。

---

28) *Hendon & Finchley Times*, 18 August 1933.

英国公文書館蔵の大川周明「日本における汎アジア主義の精神」英語原文と翻訳

Copy of letter written by Shumei Ohkawa, Tokio, dated the 15th April 1917, to the Editor, *Modern Review*, intercepted by the Censor.

(FO 371 3068, no 193952, 8<sup>th</sup> October 1917, page no. 359-362)

#### Spirit of Pan-Asianism in Japan

It has been a very common misconception even among highly intelligent and informed public of China and India that Japan has no other ambition than taking some territory from China and some other Asiatic country. Some of the scholars go so far as to accuse Japan to be in league with the European Powers to dismember China. It is a pity that the Asiatic people do not understand one another, not because of inborn antipathy or something as race prejudice, but primarily because of the lack of first hand [sic] information of one another and language difficulty forms a veritable barrier against mutual understanding. In India and China, the most intelligent people, because of their complete ignorance of Japanese language and thus not being able to make first hand impartial judgment about Japan are led to believe many things spread by European and American people who at heart hate Japan.

In the past Japan followed Europe and America to learn many things of the west to preserve the national integrity and independence of the island Empire. The Japanese people for a short time probably thought less of their ancestral treasures in the field of culture, but today reaction is very strong against such ideas. Japanese know that they have many things to learn from the west, they have at present closer relation with the west in all field of human activities; but it is also certain that the far-sighted Japanese 'who live in the present for the future and not merely for the present' thoroughly realise that in the long run the fate of Japan is inseparably connected with the fate of Asia as a whole. So there has arisen the Pan-Asian movement. The doctrine of 'Pan-Asianism' has its ardent advocates in the most enlightened circles of Japan including statesman, journalists, and men of legal and medical professions, Hon: Mr. Iichiro Tokutomi, the Chief Editor and Proprietor of the Kokumin Shimbun, the Crown Member of the House of Peers of Japan is one of the foremost advocates of this principle. I shall quote extensively from Mr. Tokutomi's recent and most popular work 'The Rising Generation in the Taisho Era and the future of the Japanese Empire'.

'What then, is the mission of the Japanese Empire? In my opinion it is of more urgent

importance for Japan to restore the equilibrium between the white and yellow races than to indulge in the chimerical theory of accomplishing the unification of the world, as is preached by some irresponsible Japanese. To speak frankly, it is out of question for Japan to attempt the unification of the world, for she has just secured her own independence in world politics. In other words, she has come to be regarded by the other powers as an independent state only quite recently. In the meantime the influence of the Whites is fast making itself felt on Japan's neighbours in the East. What are the conditions prevailing in China, India and Persia? There is indeed not a country east of Suez which is not under the influence of the Whites; with the single exception of Japan. Are there any prospects of carrying out the principle of racial equality under these conditions?..... It is our firm conviction that the mission of the Japanese Empire consists in carrying out the Asiatic Monroe Doctrine in the most complete manner. By this Asiatic Monroe Doctrine we mean the principle that Asiatic affairs should be dealt with by the Asiatics..... There must be no misunderstanding as to the meaning of this doctrine. We do not hold so narrow-minded a view as to wish to attempt to drive the West out of Asia. What we want is simply that we become independent of the Whites..... The most essential point the Japanese people should bear in mind in carrying out the Asiatic Monroe Doctrine is that they must first win the respect and affection of the Eastern races and the deference of the Whites. The Asiatic Monroe Doctrine is the principle of Eastern autonomy, that is of Orientals dealing with Eastern questions..... It is clear as light that the above theory will be received by the Whites with anything but favour, but world affairs cannot always be settled to the advantage of the Whites, nor were we born to serve the Whites. Whether it is convenient or inconvenient to them, they cannot offer any strong opposition to our steps which are taken in accord with a sense of high justice. This is the reason why we unhesitatingly uphold the principle of an Eastern autonomy.....'

Another distinguished writer, explorer and scholar, Count Kozui Otani, formerly Abbot of the Nishi Honganji Temple and Head of that Buddhist organisation, has written a remarkable article 30 pages, in the Central Review (Chuo Koron or [sic] Tokio) in which he describes the critical condition of Japan in the field of world politics. The learned author advocates Pan-Asianism. 'The weakness of China is a perpetual source of danger to Japan. The development and progress of Asia require the harmonious relations between Japan and that country, and Pan-Asianism must be the guiding principle to regulate these relations. Japan may find it her inevitable task to lead that nation to

stability though she must never harbour territorial and other ambitions'.

Mr. Unosuke Wakamiya, a distinguished scholar of Sociology and Chief Editor of 'Chuo Shimbun' in an article appeared in the April number of Chuwo [sic] Koron (Central Review) entitled 'What is meant by the Great Asia Policy?' advocates the doctrine of Pan-Asianism. Among other things he attacks the Western Civilization to be barren.

'The spirit of western civilization is plunder. Western Civilization, as it aims at plundering other nations on the principle of national selfishness, make it a point to plunder the labouring classes by means of concentration of capital. This is where the sign of bankruptcy of the western civilization lies.....' An indirect cause of calling for establishment of a Great Asia Policy is that Western civilization cannot be greatly depended upon; in other words, that policy should expose the existing state of Western civilization, which is partly based upon greed and plunder. We Asiatics at one time entertained childish curiosity about Western civilization. Soon we have grown up and we have passed the childish stage. We have now come to have the opportunity of knowing the truth about Western civilisation from the point of view of critics..... The direct cause for establishing the Greet Asia Policy is needless to say, the unlawful pressure of Western Powers upon Asia. There is some minor difference between England and Germany, in that former is like a dog and the latter is a monkey, between Russia and France, which are not so much alike as they seem to be. But they are a unit in so far as they bear a pressure upon Asia. There is humanity among the robbers who have their own language of morality which sounds plausible. But the justice of the west is injustice for Asia, and the humanity of the west is brutality for Asia. Where is the ground in possession of a western nation without the sign 'no admission for Asiatics'? It is a great mistake to think that America is the only country where the sign 'Japanese shall not enter' is displayed. Can any Japanese travel in India with safety without the questioning eyes of British authorities being focused on him? In short, westerners exclude Asiatics wherever is possible. They take every opportunity to establish their power whether in the west or in the east, by robbing the Asiatics of their future. Westerners are selfish and self-centred. The fate of Asia is now in the balance. Either the Asiatics must submit to the selfish will of the westerners, or strike out for themselves a Great Asia Policy to restrain Westerners.' In the end he says that it will make no difference whether Japan changes her alliance from England to Germany, for the two European nations are the same in so far as their Occidentalism and their psychology of international robbery are concerned. Japan is in

the state of isolation. Her salvation lies in establishing this great policy for Asia as well as for herself.

Dr. Sawayanagi, formerly the Minister of Education, in an article an [sic] 'Civilised (or peaceful) Pan-Asianism' contributed in Shin Nippon or New Japan, Marquis Okuma's Magazine, advocates the idea of Sino-Japanese Armament alliance and advocates the principle of Pan-Asianism in the following way. 'I deem it almost imperative for the Japanese people to stand by what may be termed the Asiatic principle based on peaceful ideas of civilized Pan-Asianism. Pan-Asianism may embrace India, Persia, Siam and Annam, as well as China, but as this would extend its scope too far, other countries except China may well be excluded from it..... In order to administer Eastern affairs in conjunction with China Japan must secure the development of her science and civilization to such a degree as to win the confidence of the Chinese people. Japan, however, is still lingering in the stage of imitation in these matters, and accordingly in no direction is she worthy of China's wholesale respect. It is, therefore, most important that Japan's civilization should be developed to such a state as can compare favourable with that of European and American countries'.

Mr. Inukai, the leader of the 'Kokuminto' or the National Party of Japan, in a speech delivered on February 12, 1917, at the Headquarters of the party in Okayama declared that 'It was surprising to the Japanese that the decision of the Allies that Turkey should be permanently ousted from Europe. In other words, Mr. Inukai is reported to have remarked, this was tantamount to declaring that though the Whites were at liberty to own territories in Asia and Europe, the Yellow race was denied similar privileges in Europe'. Mr. Inukai as the staunchest friend of the cause of Sino-Japanese friendship advocates the idea of adoption of Pan-Asian policy and strongly urges that for the safety of Japan from future complications of the world-politics and for the sake of cause of Pan-Asianism Japan must be determined to annex the South Sea Islands.

Dr. Hosuke Nagase who is connected with the General Staff of the Japanese Army and regarded as the highest authority of the Balkan question in Japan has recently contributed an article in Marquis Okuma's Magazine 'Shin Nippon' and he discusses the peace terms of the Entente-Allies. He among other things remarks 'In the allies reply to President Wilson's Peace Note it was pointed out, among other things, that the Ottoman Empire should be driven back to Asia. This proposition has provoked much sentiment among a section of the Japanese people, who indignantly declare that protest must be

made against such actions..... Since Japan is fighting Germany in conjunction with the other Entente Powers, it is but proper that she should be always mindful of taking concerted action with the Allies until the final victory is gained, but at the same time it must be remembered that the Japanese are not a European race, that they are vastly different from the European Powers both historically and geographically and consequently their interests are not always those of their European Allies. In other words we must give the most careful consideration to the result of the present war from the Japanese standpoint..... Japan participated in the present war not on account of a nebulous sense of justice or defence of liberty, but from the necessity of protecting her interests as an independent State. Japan therefore ought to demand of the other Allies a voice in the disposal of the Ottoman Empire..... If their (Entente Allies) attitude is based upon racial prejudice, and this is the real reason why the Turkish race must not be allowed to hold territory among European races, we must protest in the most emphatic manner[.....]. [sic] In whatever way the European war may be terminated, the question of the disposal of the Ottoman Empire will certainly come up for discussion at the Peace Conference. On that occasion..... Japan will be the sole representative of the Asiatic race, and in my opinion it is the duty devolving upon this country to speak on behalf of the Turk on that occasion, if not to claim the emancipation of the whole Asiatic race['].

I should also like to have Japan demand autonomy for the Indians, but as this would not only be equivalent to interfering with the domestic administration, Japan's ally, but be a question independent of the present hostilities, Japan would have to leave this point.

'..... Japanese people are proud of having Britain as their Ally, but as a matter of fact they are no more than their subordinates. How long are the Japanese people going to be contented with their present condition? It is most important for them to improve their present condition with a view to placing their country on the same footing with the first rate powers of the world, in the strictest sense of the term..... In the past Japan had to take the sentiment of the powers into too much consideration in formulating her own attitude. In the future Japan must have the courage to advance her views upon world politics and make other powers listen to them'.

Pan-Asianism movement has been regarded by many as something vague and impracticable. But after minute analysis of the movement it would be absolutely clear that it is not only practicable but imperative for the cause of Asian independence. At the present moment this idea is strongest in Japan than in any of the Oriental countries

because Japan is politically independent and strong and her people feel more keenly about the humiliating position of the people of Asia. Asian people may not unite on mere cultural or religious basis against the aggression of the western nations, but it is quite reasonable that to preserve their political and economic interests in their own respective countries they would make a common cause.

Realisation of the ideal of Pan-Asianism depends more upon the realisation of the object of free and strong China than anything else, and for this very reason the far-sighted Japanese statesmen are so keenly interested to have friendly relations between China and Japan and to strengthen China with Japanese co-operation.

（翻訳）検閲により押収された東京の大川周明による手紙、  
『モダン・レビュー』編集者宛て 1917 年 4 月 15 日付

#### 日本における汎アジア主義の精神

中国やインドの知的で見聞の広い国民の間でさえ、日本は中国や他のアジア諸国からいくばくかの領土を手に入れることしか頭がないという誤解がいまだに根強い。学者のなかには、日本が欧州諸国と結託して中国を分割しようとしていると非難する者までいるくらいだ。生来の反感や人種的偏見のようなものではなく、直接、アジア人同士で情報をやりとりできないため、相互理解が欠けており、言語が深刻な障壁となってしまうことは、実に残念というしかない。インドや中国の最も英明な人たちはまず日本語を知らず、そのため日本について、直接、公正な判断を下すことができない。したがって、日本を心の底で憎む欧米人の宣伝を鵜呑みにせざるをえない状態にある。

たしかに、かつての日本は島を中心とする帝国の保持と国家の独立を維持するため、西洋の事物を学ぼうと欧米を模範としてきた。日本人は先祖から継承した文化的な財産について考えが及ばなかったといえるだろうが、それはごく短期間であり、今日、そうした考えは反感を買うものでしかない。西洋に学ぶべきことが多いことなら、日本人は百も承知している。現に、およそ人間の活動に関するありとあらゆる分野において、日本は以前よりも密接に西洋と関係を築きあげているからだ。しかし、先見の明のある人間、つまり、「現在のためにだけでなく、未来のために現在を生きる」日本人にとって、長期的にみれば、日本の運命がアジア全体の運命と不可分に結びついていることは、自明の理である。ここに汎アジア主義が生まれた背景がある。政治家、言論人、法学者、医学者など日本の頭脳ともいえる階層には、汎アジア主義を信奉する一群の人々がいる。その熱烈な支持者の一人が徳富猪一郎閣下

である。閣下は、国民新聞の主筆かつ社主であり、貴族院の議員でもある。以下、閣下の近刊で、最も話題となった著作『大正の青年と日本帝国の未来』から、広範囲にわたって引用することにしたい<sup>1)</sup>。

「それでは日本帝国の使命は、どこにあるのだろうか？ 私見では、一部の日本人が主張するような世界の統一という白昼夢につきあうことではない。日本がなすべき危急かつ重要な使命は、白色人種と黄色人種との間に平衡関係をとるもどすことだ。ありていにいって、日本が世界を統一しようという考えなど論外でしかない。日本は国際政治のなかで独立をかりうじて確保しているだけの存在にすぎない。いいかえれば、日本がほかの列強に独立国家として認められるようになったのはごく最近のことである。その間にも白人の影響は、東洋における日本の隣人に急速に力を及ぼしつつある。中国、インド、ペルシャで繰り広げられている状況は、一体、何なのか？ 事実、日本という唯一の例外を除いて、スエズ運河より東は、みな白人の影響下にある。このような状況で、人種平等の原則を遂行する望みはどこにあるのだろうか<sup>2)</sup>？（中略）アジア的モンロー主義を完全な形で実現すること、これこそが日本帝国の使命だと、わたしたちは強く確信するものである。アジア的モンロー主義とは、アジアの事はアジア人が決めるといふことだ<sup>3)</sup>。（中略）こうした原理原則に誤解の余地はあ

1) 徳富猪一郎（蘇峰）の『大正の青年と帝国の前途』（民友社、1916）を指す。

2) この一節は、蘇峰の『大正の青年と帝国の前途』にある小節「亜細亜モンロー主義」をおおむね正確に翻訳したものである。ただし、その英語の訳文は、*Japan Weekly Chronicle* 紙 1917 年 1 月 25 日掲載の 'The White and Yellow Races, The Asiatic Monroe Doctrine Explained, Japan's Mighty Mission' の引用とそのまま一致する。この記事は蘇峰のアジア的モンロー主義を批判的に紹介し、一部を英訳したものであり、大川の文書が押収されるより約 3 ヶ月前に掲載されている。したがって大川は、蘇峰の『大正の青年と帝国の前途』からアジア主義に関連する箇所を英訳したのではなく、同記事が引用の際に英訳した蘇峰の一節を、それと断ることなく、適宜、引用したと思われる。

以降で大川が引用するアジア主義者の論考も、英語圏の新聞雑誌が批判的に紹介する記事での訳文とそのほとんどが一言一句まで一致しており、自ら英訳することなく、転用した可能性が極めて高い。これら一連の記事を掲載していたのは、日本の *Japan Weekly Chronicle* 紙や *Japan Advertiser* 紙、あるいは上海を中心に広く東アジアで流通していた *The Far Eastern Review* 誌など、いずれも日本の帝国主義に批判的な媒体であり、反宣伝のため大川が日常的に参照していたことを示唆するものともいえよう。

なお蘇峰の原文における該当箇所は以下の通りである。以降の引用に際しては、適宜、新字体と現代仮名遣いで表記した。

「果して然らば、日本帝国の使命は奈何。少くとも吾人をして、手の届く限りに於て、我が理想を求めしめよ。吾人は世界統一に先んじ、世界に於ける黄白人種の均衡を恢復するを以て、寧ろ急務とせざる可からざるにあらずや。露骨に云えば、日本の世界に於ける位置は、世界統一杯とは以ての外也。今日の日本は、僅かに自国の独立を全うするを得たる迄也。乃ち最近に於て、漸く一人前の者としての、待遇を得たりし也。

然も白人の勢力は、我が脚下に及びつつあり。支那は奈何、印度は奈何、波斯は奈何。吾人は遠方と云わず、蘇士以東、我が日本を除きて、殆んど白人の勢力の下にあらざるものなきを見る也。斯る情態の下に於て、果して人種の平等主義を実行するの望ある可き乎」。『大正の青年と帝国の前途』の「亜細亜モンロー主義」から（pp.401-2）。

3) この英文は 1917 年 1 月 25 日付 *Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用と同じである。蘇峰の原文は、

るまい。だからといって、なにもアジアから白人を一掃したいという狭量なことをいっているのではない。われわれの望みは、ただ白人から独立したいということだけなのだ<sup>4)</sup>。(中略) このアジア的モンロー主義の実現にあたり、日本人が心すべき重大な点は、東洋人からは尊敬と好意とを、白人からは恭順を勝ち取ることだろう。アジア的モンロー主義とは、東洋問題は東洋人が処理するという、東洋自治主義にほかならない<sup>5)</sup>。(中略) 当然ながら、こうした主張は白人たちにおよそ好意をもって受け入れられることはないだろう。しかし、世界の問題は、いつも白人にとって都合良く解決されるわけでもなく、われわれは白人に仕えるために生まれたわけでもない。われわれの行動が彼らにとって好都合であろうとなかろうと、高邁な正義の実現のための手段である以上、強く反対することはできない。われわれが東洋自治の原則を掲げるのに躊躇しないゆえんである<sup>6)</sup>。

続いて優れた書き手であり、探検家かつ研究者でもある大谷光瑞をとりあげたい。西本願寺派の元法主であり、宗派の仏教徒組織の長でもある大谷は<sup>7)</sup>、最近の『中央公論』（発行地は東京）に 30 頁にもおよぶ堂々たる論文を寄稿し、そこで国際政治における日本の危機的な状況を活写した<sup>8)</sup>。この博学な著者が主張するのも汎アジア主義である。つまり、中国の弱さは、日本にとって常に危機を起こす火種となる。アジアの発達と進歩は、日本と彼の国とが相和することが必須条件なので、汎アジア主義こそ、両国の関係を規定する原理原則ということになる。領土拡張やそれに付随した野望というものなどを日本はまったく隠し立てし

---

以下の通りである。

「吾人は日本帝国の使命は、完全に亜細亜モンロー主義を遂行するにありと信ずる也。亜細亜モンロー主義とは、亜細亜の事は、亜細亜人によりて、之を処理するの主義也」。『大正の青年と帝国の前途』の「亜細亜モンロー主義」から (p.402)。

- 4) 1917 年 1 月 25 日付 *Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。蘇峰の原文は、  
「誤解する勿れ、吾人は亜細亜より白人を駆逐するが如き、福狭なる意見を有するものにあらず。但だ白人の厄介にならぬ迄の事也」。『大正の青年と帝国の前途』の「亜細亜モンロー主義」から (pp.402-3)。

蘇峰は続けて、「白閥の殿屋を蕩掃する迄の事也」と、一步踏み込んで介入の排除まで主張して文を結んでおり、この箇所も英訳されているが、大川は省略している。

- 5) 1917 年 1 月 25 日付 *Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。蘇峰の原文は、  
「之を要するに、亜細亜モンロー主義を実行するの第一要件は、自余の東洋人種よりは、敬愛せられ、白人種よりは、少くとも畏憚せらる可き、位置を占めざる可らず」。『大正の青年と帝国の前途』の「亜細亜モンロー主義」から (p.403)。
- 6) 1917 年 1 月 25 日付 *Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。対応する蘇峰の原文は、以下のよう、『大正の青年と帝国の前途』の「亜細亜モンロー主義」から次々節の「大乘的使命」にある。  
「東洋自治論の、白人間に歓迎せられざるや、火を賭るより明けし。さりとて世界は白人を中心として、運行す可きにあらず。吾人は白人に奉仕せんが為めに、生活するにあらず。彼等に取りて、好都合にせよ、不都合にせよ、世界共通の大道理に遵拠して、之を行わば天下誰か之に敵せむ。是れ、吾人が東洋自治の大飾を掲げて、毫も畏避せざる所以也」。『大正の青年と帝国の前途』の「大乘的使命」から (p.409)。
- 7) 大谷光瑞が浄土真宗西本願寺派の法主を辞したあと、光寿会を組織したことを指すと思われる。
- 8) 『中央公論』1917 年 3 月号の巻頭論文、大谷光瑞の「帝国之危機」を指す。

てはいないが、中国を安定した状態に導くことは、およそ日本にとって避けようがない使命となるだろう」<sup>9)</sup>。

『中央新聞』の主筆で卓越した社会学者である若宮卯之助氏も、汎アジア主義を展開している。『中央公論』の4月号に「大アジア主義とは何か?」を寄稿した氏が、特に力を入れて批判するのは、西洋文明の不毛な点である<sup>10)</sup>。「西洋文明の本質は略奪にある。西洋文明は、自国本位の利己主義を盾に他国からむしり取るように、国内では、資本の集中によって労働者階級を搾取している。これこそ西洋文明崩壊のほころびである<sup>11)</sup>。(中略)大アジア主義を叫ぶ間接的な理由としては、もはや西洋文明に深く依存することができないということが挙げられる。言い換えれば、西洋文明の一面は貪欲と収奪に基づいているという現状を、暴露しなければならないということでもある。なるほど、かつてのわれわれ東洋人は、西洋文明に対して幼稚なまでの好奇心を抱いていた—しかし、すぐに東洋は成長し、そのような幼年期は終わりを迎えた。今やわれわれは、西洋文明に対して批判的な視点を持ち、真実を知

9) 光瑞の原文に、直接、該当する箇所は見られない。また「帝国之危機」の英訳は、管見の限り、いまだ見つけられていない。おそらく『中央公論』1917年3月号の「帝国之危機」の以下のような記述を、適宜、大川が要約して英訳したと思われる。

「亜細亜主義とは外患を治する妙用なり。即ち亜細亜人の平和と福祉を増進せしめ、他国の来て亜細亜を侵凌暴虐をなさんとするを禦くなり。是日本民族の天職なり、使命なり。是を能わざれば我民族は存せず。今支那の如きは明かに此の主義に反せる行動をなせり。国を挙て騒擾紛々一日の安なし。自国に禍するのみならず累を隣邦に及せり」(p.23)。

「我國民は親善の名の下に支那の未発の富源を奪わんとし、支那は親善の名の下に日本の圧迫を少なくも歐洲平和の後まで延期せんとす。故に欺断と云う」(p.24)。

「故に日支の間親善の実を挙げんと欲せば必ず亜細亜主義の基礎の上に立たざるべからず。然らざれば百年を期するも親善の機あらざるべし。今我國の支那に対し最も歎く所は教育なり」(p.27)。

「今日の如く欺断を以て経とし、甘言と威嚇を緯とし、以て支那問題を解決せんとす。其患彼に非ずして我に在り。憚れざるべからず。故に日く、支那問題の解決は大亜細亜主義の基礎の上に立ち、支那の完全なる独立をなさしむるにあり。是を除て他策なし。日支親善と云うも是を行うに非らざれば決して其実を期する能わざるなり」(p.29)。

つまるところ光瑞は1915年のいわゆる対華21箇条の要求とその反発をおそらく念頭において、日本の露骨な帝国主義を批判しつつ、中国の独立を確実にするためには日本の介入は不可欠とし、その大義としてアジア主義を唱えている。しかし、大川は縮約の際に、こうした含意を省略している。

10) 『中央公論』1917年4月号の巻頭論文、若宮卯之助の「大亜細亜主義とは何ぞや」を指す。ただし、英語の訳文は、1917年5月号の *The Far Eastern Review* 誌掲載の 'The Pan-Asian Movement' が引く *Japan Advertiser* 紙が報じた若宮論文の英訳とはほぼ同一である。残念ながら現段階では *Japan Advertiser* 紙の書誌を確認できなかったため、大川が引用したのは、*The Far Eastern Review* 誌か *Japan Advertiser* 紙のどちらを利用したかは不明である。いずれにせよ、本稿で大川が英語圏における日本の帝国主義批判の記事を逆用しているところから考えて、両者どちらかの既存の英訳を利用したと考えられる。

11) *The Far Eastern Review* 誌1917年5月号が引用する若宮の「大亜細亜主義とは何ぞや」の英訳に同じ。なお『中央公論』1917年4月号において、該当する原文は以下の通り。

「西洋文明の精神は掠奪である、自然界の掠奪を移して直に之を人間界に用うるは西洋文明の手段である。西洋文明は国民的暴利主義に依って他国を掠奪するが如く、集中的資本主義に依って労働階級を掠奪するを其の特色と為すものである。此に西洋文明の破綻がある」(p.4)。

るようにまでなったのである<sup>12)</sup>。(中略)大アジア主義を掲げる直接の理由が、西洋列強のアジアに対する不当な抑圧にあることは言うまでもあるまい。たしかにイギリスとドイツのあいだに微妙な差異は見られる。イギリスを犬とすれば、ドイツは猿ということになるだろう。ロシアとフランスにしても、両者は見かけほどには似ているわけでない。しかし、アジアを抑圧するという点で、彼らは一心同体である。盗人でさえ、もっともらしく聞こえる道徳というものは持ち合わせているものだ。しかし、西洋の正義はアジアの不義であり、西洋の人道はアジアにとって野蛮でしかない。西洋が支配する領土で、「東洋人立入禁止」の札がない場所がどこにあるだろうか？「日本人入るべからず」の立て札が掲げられているのはアメリカだけというのは、大間違いだ。いったいインドを旅する際に、英国の官憲に疑わしい目でじろじろ眺められず、安心して過ごせる日本人がいるというのだろうか？要するに、西洋人は可能であれば、どこでだって東洋人を排除するものなのだ。西洋人はあらゆる機会をとらえては東洋人から未来を奪い、そこが西洋であろうと東洋であろうと、支配を確立しようとする。利己的かつ自己中心的なのが西洋人である。アジアの運命は、いままさに瀬戸際にある。西洋人の利己主義に屈服するのか、西洋人に抑制を促し、自衛のために大アジア主義を押し出すのか、二つに一つを選ばなければなるまい<sup>13)</sup>。最後に若柳氏は、イギ

12) *The Far Eastern Review* 誌 1917 年 5 月号が引用する英訳に同じ。なお『中央公論』1917 年 4 月号「大亜細亜主義とは何ぞや」にみる若宮の原文は以下の通り。

「大亜細亜主義の建立を促さんとする間接の原因は、西洋文明の甚だ恃むに足らざる事、言い換えれば、其の一面に於て貪欲を性と為し、掠奪を主義を（ママ）為して居る西洋文明の現実暴露である。我等亜細亜人は、西洋文明に対して曾て小児の好奇心を懷いた時代もあった。既にして我等は成長した、而して其の小児の時代を通過した。我等は今や独立批評家の地位に立ちて西洋文明の陣立を透見すべき機会に逢着した」(p.5)。

13) *The Far Eastern Review* 誌 1917 年 5 月号が引用する若宮の「大亜細亜主義とは何ぞや」の英訳をほぼそのまま引用している。ただし、*The Far Eastern Review* 誌では、'Where is there ground in possession of a western nation with the sign of admission for Asiatics?'（「西洋が支配する領土で、東洋人用入口の札がある場所がどこにあるだろうか？」, p.450）と若宮の原文を誤訳している。一方、大川は 'Where is the ground in possession of a western nation without the sign "no admission for Asiatics?" と原意通りに引用している。*Japan Advertiser* 紙の原文を確認できていないが、上海が拠点の *The Far Eastern Review* 誌が原文の『中央公論』を参照したとは考えにくく、*Japan Advertiser* 紙の記事をそのまま引用していると思われる。したがって、大川自身が英訳を修正した可能性が高い。ただし、この *The Far Eastern Review* 誌が引用する若宮の英訳は、原文を若干省略しているものの、大川はそこはそのまま補充せずに引用している。なお、該当する若宮の原文は以下のように分散している。

「大亜細亜主義の建立を促さんとする直接の原因は、言うまでも無く、西洋勢力の亜細亜に対する不法なる包圍攻撃である。(中略)英と独とは犬と猿との逆縁であるが如く、露と仏との似て非なるは、支那と日本との異りに超んとする。(中略)其の亜細亜に対する態度に於て、彼等は全く無差別なる単数の西洋である。盗賊の間に仁義の存するが如く、彼等仲間の合言葉には、聴いて快き、読むで感じ善き、行って麗わしき多くの抽象名詞がある」(p.8)。

「焉んぞ知らん、西洋の正義は、亜細亜に於ては不義であり、西洋の人道は亜細亜に於いては獣道であることを。(中略)世界の何処に「亜細亜人入るべからず」の禁札を見ざる西洋人の領土がある。近眼なる日本人が、排日の本場を米国だけに認むる間に於て、日本の盟邦として、日本の利

リスにしてもドイツにしても、西洋至上主義や国際的な収奪を是とする心性という点で似通っているのが、日本の同盟国がイギリスからドイツに変わっても大差はないだろうと述べている<sup>14)</sup>。日本は孤絶した状態にある。窮状を脱するのは、日本のためだけでなくアジアのために、この偉大な政策を確立することにあるのである。

元文部大臣の澤柳氏は<sup>15)</sup>、大隈侯爵の主宰する雑誌『新日本』に「啓蒙的（平和的）汎アジア主義」という論文を寄稿し、日中同盟を提唱して、以下のように汎アジア主義の原則を主張している<sup>16)</sup>。「啓蒙的な汎アジア主義という平和的な理念にもとづき、アジア的原則ともいえる運動を支援するのは、日本人にとってほとんど義務なのではないか。ただ汎アジア主義というと、中国だけでなくインド、ペルシャ、暹羅、安南も含まれることになり、これではあまりに大風呂敷を広げすぎることになる。したがって、中国以外の国は除外した方がいいのかもしれない<sup>17)</sup>。（中略）東洋問題を中国と協調しながら処理するため、日本は科学と文明を十分に発達させ、中国の人々から信用を勝ち取る必要があるだろう。ただ、これら

---

用に抜け目なき英国は、其の領土の隅々にまで、既に筆太に「日本人入るべからず」の禁札を掲げ盡くして居るでは無い乎」（p.8）。

「今や日本人は、英国官憲から痛くも無き腹を探られずに、安全に印度の旅行を終るを得る乎。（中略）略して言えば、西洋人は苟も其の西洋の勢力の及ぶ限りに於て、飽くまで亜細亜人を排斥し盡して必ず其の未来を奪わんとする。其の欧洲であると、米国であると、豪洲であると、南阿であると、印度であると、支那であるとを問わず、飽くまで白人の天下を実現せんとするは、日は一日より愈々露骨ならんとする、彼等西洋人の我儘ではない乎。今や亜細亜の運命は、全くイチ乎バチ乎である。退いて此の西洋人の我儘を神妙に忍辱する乎。進んで此の西洋人の我儘を有効に制裁する乎」（p.9）。

- 14) この大川の英文も、*The Far Eastern Review* 誌 1917 年 5 月号が若宮論文を要約した箇所とほぼ同じである。なお「大亜細亜主義とは何ぞや」の最終段落を若宮は以下のように結んでおり、要約とも対応している。

「日英同盟に換うるに日独同盟を以てすると云う乎。是れ単に独逸を英国に置き換えるだけである。所謂白人主義、西洋主義の国際強盗に心理は之が為に毫末の影響を蒙るものではない。今や日本の恃む所は、其の最後の理想と偽らざるを得ざる大亜細亜主義を外にしては、纔に其の白人主義、西洋主義の国際強盗仲間の仲間喧嘩だけである。此の甚だ恃むに足らざるを恃まざるを得ざる日本の現実には是れ果して日本人の転換するを得ざる其の宿命である乎」（p.14）。

- 15) 澤柳は文部大臣には就任していない。ただ文部次官として辣腕を振るい、教育行政に深く関与したため、煩瑣な説明を省いて単純化したと考えられなくもない。
- 16) 『新日本』1917 年 3 月号掲載の澤柳政太郎の「文化的汎亜細亜主義を提唱す」を指す。ただし、英語の訳文は、1917 年 3 月 22 日付の *The Japan Weekly Chronicle* 紙掲載の記事 'Pan-Asianism: Peaceful as Opposed to Aggressive: Dr. Sawayanagi on Japan's Future' で抄訳された英文とほぼ同一である。
- 17) 1917 年 3 月 22 日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。ただし記事は、『新日本』1917 年 3 月号掲載の澤柳論文を縮約して英訳している。澤柳の「文化的汎亜細亜主義を提唱す」において、該当する原文は以下の通りである。

「斯かる主義を奉じて結束し活躍する事の吾人日本国民に取って甚だ必要なるを思うものである。併し汎亜細亜主義というと、其中には印度から波斯、更に南洋の一部に属する暹羅、安南を迄含む様になるが、それは余りに包括の範囲が広漠に失するから暫く擱くとするも、支那だけは古来歴史上、地理上、人種上、人文上日本に密接の関係ある所だから、将来は益々相提携して立つべく、所謂亜米利加のモンロー主義を此処に發揮すべきである」（p.29）。

の分野で、日本はいまだ模倣の域を出ることがなく、中国から全幅の信頼を寄せられる状態とは残念ながらいえない。それゆえ、日本の文明が欧米と比べて遜色ない段階にまで発展することは、最重要事項といわねばならない」<sup>18)</sup>。

1917年2月12日、国民党代表の犬養氏は、岡山の党本部での講演で以下のように語気強く述べた<sup>19)</sup>。「日本人にとって驚くべきことは、トルコがヨーロッパから恒久的に追放されるよう、連合国が決定したことだ。この点について犬養氏は、つまるところ白色人種はアジアやヨーロッパに自由に領土を獲得してよいが、黄色人種はそのような特権をヨーロッパの地で行使することは認めないというわけで、実に暴言に同じと述べたという」<sup>20)</sup>。何よりも日中友好を持論とする犬養氏は、汎アジア主義を政策として実行するよう主張しており、国際政治の複雑化の観点から日本の安全のため、そして汎アジア主義の大義を実現するため、日本は南洋諸島の合併を決断しなければならないとも力説している<sup>21)</sup>。

陸軍参謀本部に所属する長瀬鳳輔博士は、日本におけるバルカン問題の最高権威と目されているが、先般、大隅侯爵の雑誌『新日本』に寄稿し、連合国の講和条件について考察している<sup>22)</sup>。長瀬博士が特筆するのは、「ウィルソン大統領の講話覚書に対する連合国の回答に、

18) 1917年3月22日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。ここでも記事の英訳は、逐語訳ではなく澤柳の論文を適宜要約した縮訳である。該当する澤柳の原文は以下の通り、二か所に分散している。『新日本』1917年3月号の「文化的汎亜細亜主義を提唱す」から引用する。

「更に将来支那と提携して共に東亜の大局に任ずるには、支那人をして吾人に信頼せしむべく、我学術の進歩と文化の発展とを切望せざるを得ぬ。此点に於て私は我教育界並に學術界に対して大なる不満を感じ、一大警策を加えんと欲する。日本の現代の文化、即ち其學問といえ芸術といえ、今日の有様では猶お模倣時代で、創造時代に入らず、従って其方面に向つて最高權威を要求する事が出来ぬ」(p.31)。

「甚深の理を尋ねて學術を研究せんとするものは、勢い英、仏、独等の原書を繙読せなければならぬ。是に於てか彼等支那人には日本國民の腦力の深淺が知れて仕舞うので、日本に信頼せんと欲しても信頼し得ぬ事になる。それ故單に日支提携上からいって日本は此方面に一大躍進を為さねばならぬ」(p.31)。

19) 当時、立憲国民党代表だった犬養が演説したのは岡山の党本部ではなく、党支部である。

20) 直接、大川が参照したと思われる資料は不明である。犬養の演説については、1917年2月12日付『東京朝日新聞』朝刊に、「犬養総務演説 岡山支部総会席上」という短報が掲載されているが、ほかの詳しい紹介を参照したと考えられる。なお、同記事には、以下のように、ほぼ大川の引用に該当する記述がある。それによれば、犬養は「驚くべきは土耳其は欧羅巴の領土を永久に有つことを許さないと云うことで之を換言すれば白人は亜細亜に欧羅巴に領土を有つことは出来るが黄色人種は是等の方面に領土を有つことを許さないと云うので」ある、と演説したという。

21) 1917年2月12日付『東京朝日新聞』朝刊には、直接の発言は見いだせない。ほかの資料を利用したか、犬養の持論を紹介したかと思われる。ただし『東京朝日新聞』で犬養は、「日本の飯は支那から供給を受くるの外はない然るに支那海の制海権を失えば実に困難の地位に立つのである軍需品以外の工業に於ても今日の紡績の如きは最も優秀の地位に在るが印度綿花の輸入が杜絶するとせば是又支那の綿花を輸入しなければ今後列国との対抗は出来ないのである」と報道されている。したがって犬養は、中国の米とインドの綿花の輸入を確実にするための制海権を理由として、南洋諸島を支配する必要を訴えていると考えられる。しかし、この点について大川は触れていない。

22) 『新日本』1917年2月号掲載の長瀬鳳輔「土耳其帝国の処分に対する緊急動議」を指す。ただし、英語の訳文は、1917年2月22日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙掲載の記事 'Japan's Latest

オスマン帝国はアジアへと放逐されるべきだという驚くべきくだりがあることだ。この提案は、一部の日本人をひどく憤慨させ、そのような決定に対しては断固として抗議をすべきと息巻いているほどである<sup>23)</sup>。(中略)日本は連合国と共同してドイツと戦っているのだから、最終的な勝利が確定するまでは、同盟国と協調して行動するよう常に注意しなければならない。しかし、同時に、日本人はヨーロッパ人ではなく、歴史的にも地理的にもヨーロッパ人とはかけ離れており、日本人の利益は必ずしもヨーロッパ列強と重なるものではないことも念頭におく必要がある。つまり、現在の戦争の結果については、日本の立場というものを慎重かつ熟慮を重ねて検討することが肝要である<sup>24)</sup>。(中略)日本は漠然とした正義感や自由を守るという感情などから、現今の戦争に従事するものではない。独立国家として自国の利益を守る必要があるからこそ戦っているのである。したがって日本は、オスマン帝国の処分に関して、他の同盟国に対して日本の立場を明確に主張する必要がある<sup>25)</sup>。(中略)も

---

Mission' が引用する翻訳とほぼ同一であり、これをそのまま引用したと思われる。

- 23) 英文は1917年2月22日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。『新日本』1917年2月号の「土耳其帝国の処分に対する緊急動議」において、該当する長瀬の原文は、以下の通りである。

「現に今回聯合國より米大統領に送った回答にも第一に解決すべき緊急事の一として土耳其帝国を亜細亜に駆逐する事を挙げている。之に対して我国一部の人士中には大に憤慨し是非共抗議せねばならぬと叫んで居るものがある」(p.24)。

- 24) 1917年2月22日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。長瀬の「土耳其帝国の処分に対する緊急動議」から、該当箇所を引用する。

「我が国が独逸を共同の敵として立つて居る以上、理に於て飽迄も我が聯合國と同一行動に出で、その捷利を祝福すると共に、毫も隔意なきを期すべきは固より論を待たぬ。さりながら我國民は事実に於て歐洲民族で無い。又歴史並に地理上に於ても大に關係を異にして居る。されば勢い彼等と利害の相同じからざる所がある事を忘れてはならぬ。更に詳言すれば吾人は我が国の立脚地より現戦争の結果に対して慎重の考慮をなすの必要がある」(pp.24-25)。

ただし、長瀬はこの直後で、アジア的モンロー主義を主張するのは本意ではなく、むしろ長瀬自身、欧米協調派であることを以下の通り、言明している。

「斯く言えばとて吾輩は敢えて亜細亜モンロー主義を鼓吹しようとするのでは決して無い。否、寧ろ何処迄も人種或は宗教的偏見を斥け、歐洲先進国と相提携して、世界の平和と文明の爲めに努力し、高遠なる理想の下に邁進せねばならぬと信じて居る一人である」(p.25)。

長瀬は、そのうえで「乍併我が国」と続けるのだが、大川はこの留保部分を中略して、「我が国」以降を引用している。この留保は、英文記事では以下のように原義通り英訳されている。

'By this remark, I do not mean to propagate the Asiatic Monroe. On the contrary, I am of those who are strongly averse to the perpetuation of racial and religious prejudices, and who firmly believe in the necessity of Japan's cooperation with the advanced European Powers in the work of bringing peace and civilisation to the world' (p.301).

以降、大川が引用する同論説で、長瀬がインドの独立やアジア民族の代弁などの必要性を記していることからわかるように、長瀬はアジア主義を「鼓吹する」立場にあり、その隠れ蓑として欧米提携と人種差別反対とを強調していると考えられる。アジア主義が曖昧でも実現不可能でもなく、日本は欧州と提携して中国を分割しようとしているわけではないことを強調したい大川が、この一節を省略するのは当然だろう。

- 25) 1917年2月22日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。該当する長瀬の「土耳其帝国の処分に対する緊急動議」での原文は以下の通りである。

「我が国が現戦争に参加したるは唯漠然たる正義とか自由の爲めで無く、我が国家の生存上に於け

し彼ら（連合国）の判断が人種的偏見に基づくものだとすれば、つまり、こうした偏見を理由としてトルコ人はヨーロッパ人の土地を支配してはならぬというのであれば、われわれは強く抗議しなければなるまい<sup>26)</sup>。[中略]どのような形で欧州戦争が終結するにせよ、オスマン帝国の処分が講和会議の議題となるのは間違いない。その際には<sup>27)</sup>、(中略) 日本はアジア人の唯一の代表ということになるので、たとえ全アジア人の解放は主張できなくとも、トルコ人のために会議で発言することは、日本に託された義務ではないかと私は考えるものである<sup>28)</sup>。「私個人としては、日本にはインド人の自治を要求して欲しいのだが、これは日本の同盟国の内政干渉に等しいだけでなく、今回の戦乱とは関係ない問題なので、日本としては触れるわけにはいかないだろう<sup>29)</sup>」。

「日本人は、英国が同盟国であることを心より誇りに思っているが、実のところ日本は英国に従属しているに等しい。こうした現状を、いったいどれくらいの間、日本人は甘んじて受け入れ続けるのだろうか？ 日本が最優先しなければならないのは、文字通り、一等国と肩を並べるべく、現状を好転させることではないのか<sup>30)</sup>？ (中略) これまで日本は列強の顔色

る利害関係からである。故に吾輩は此の見地の下に、先ず茲に聯合國側に向かって翼望したいのは、土耳其帝国の処分に関して我国も亦之に容贖し得る権利の要求である」(p.25)。

- 26) 1917年2月22日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。ただし記事のこの箇所は、逐語訳ではなく、長瀬の「土耳其帝国の処分に対する緊急動議」での主張を要約して翻訳している。該当する長瀬の原文は以下の通りである。

「抑も回教国たる土耳其がその領土を巴留幹半島に有し、常に虐政を行うて、紛擾種子を撒き散らしたる結果、該半島をして歐洲禍乱の淵源地たらしめたるが故に、此際永遠にその禍根を絶ち歐洲を救済せんが為め、之を半島より駆逐して小亜細亞の地に引退せしめんとする聯合國側の主張に対しては、因より吾人の異議を扶むべき理由が無い。乍併、そが万が一にも土耳其民族は断じて歐洲民族と齒せしむべきものに非ずとの人種的偏見に基づくものとすれば、吾人は之に対して大に抗議を唱えねばならぬ」(p.25)。

- 27) 大川の英語原文では、ここに引用符があるが、前項と同じく 1917年2月22日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。前文との間に中略されている箇所があるので、そのための混乱かと思われる。「土耳其帝国の処分に対する緊急動議」中で、該当する長瀬の原文は以下の通りである。

「吾輩は現戦争が如何なる結果を以て終わるとするも、土耳其帝国の処分問題は必らず講話の議題に上る事と信ずるのであるが、その際には是非共吾人が進んで如上の要求を提出すべきであると思う」(p.27)。

- 28) 大川の英語原文では、文末に引用符はないが、前文同様に、すべて 1917年2月22日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。該当する長瀬の原文は以下の通りである。

「今次の平和会議には我国は亜細亞民族として列席する唯一の代表者である。されば此際全亜細亞民族の解放を要求せぬ迄も、せめて土耳其人の利益の為に発言するは我国の当然盡くすべき使命である」(p.27)。

- 29) 1917年2月22日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。「土耳其帝国の処分に対する緊急動議」中で、該当する長瀬の原文は以下の通りである。

「尚欲を言えば印度人のためにその自治を要求したいが、是は同盟国たる英国の内治に干渉する事にもなり、又現戦乱とは没交渉の嫌があらうから、遺憾ながら是は差し控えねばなるまい」(p.27)。

- 30) 1917年2月22日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。「土耳其帝国の処分に対する緊急動議」中で、該当する長瀬の原文は以下の通りである。

「我が国民は英国の同盟国たるを誇として居る。されど遺憾ながら實際を謂えばその従属者たる

をうかがって自分の意見を決めていたものだが、これからの日本は、列強に耳を傾けさせるよう、国際政治について持論を押し出す勇気が必要なのではないか」<sup>31)</sup>。

これまで汎アジア主義運動は、どこか曖昧で実行するには不可能とみなされることが多かった。しかし、このように子細な分析をみれば、汎アジア主義は実現可能なだけでなく、アジアの独立という大義のためには不可欠ということが明白になったかと思う。現時点では、こうした運動がもっとも熱心なのは、東洋諸国のなかでは群を抜いて日本である。日本は、政治的に独立した大国であり、アジアの人々が侮辱されることに極めて敏感だからにほかならない。

西洋列強の攻撃に対してというだけなら、アジアの民が文化的か宗教的な基盤から団結することは難しいかもしれない。しかし、アジア諸国が自国の政治的かつ経済的な利益を守るためであれば、共通の大義として十分に機能するだろう。

汎アジア主義の理想が実現するかどうかは、何よりも中国が自由となり、大国となれるかどうかにかかっている。だからこそ、それを見越した先見の明のある日本の政治家は、日中親善に強い関心を抱き、日本と協力することで中国を発展させようと心を砕いているのである。

---

に過ぎぬ。我國民は斯かる境遇を何処迄も忍ぶのであろうか。さりとは憐れなる國民である。我國民は何処迄も此の憐むべき今日の境遇を脱し、世界第一流国と同格的位置に向って進まねばならぬ」(p.27)。

31) 1917年2月22日付 *The Japan Weekly Chronicle* 紙からの引用である。該当する長瀬の原文は以下の通りである。

「小心翼翼只管列強の氣息を窺うて進退するが如きは、過去の日本である。而して将来の日本は、斯かる世界的変局に際し、進んで自己の意見を主張し、他の列強をして傾聴せしむる底の大抱負を有たねばならぬ」(p.27)。

**H. P. Shastri as Information Broker: A British Agent's Web of Lies across  
Tokyo, Shanghai, and London**

**Appendix: Okawa Shumei, "Spirit of Pan-Asianism in Japan" intercepted by the Censor**

Yorimitsu HASHIMOTO

Hari Prasad Shastri, the founder of the Shanti Sadan Center, introduced yoga to Britain in the early 1930s. According to his disciple Peter Haliday, Shastri visited Japan in 1916, accepting his guru's mandate to spread the philosophy of yoga. In Tokyo, he was invited to be a professor at Waseda University and even to explain Indian philosophy to the Crown Prince. However, emigrated Indian nationalists such as pro-Japanese Pan-Asianise Rash Bihari Bose and Hariharnath Thulal Atal, ostracized Shastri for his non-violent attitude. It was Sun Yat-sen who ended Shastri's plight when Sun invited Shastri to Shanghai in 1918.

This is Shastri's official career summary, but it is a lie. Shastri was sent to and worked for the British Embassy in Tokyo as "Agent P," according to Richard J. Popplewell. Using his lecturer position at Gita Society as a cover, he investigated the network of Indian revolutionaries, Japanese Pan-Asianists, and sympathizers such as Mira and Paul Richard. During Shastri's monitoring, Okawa Syumei's article about Pan-Asianism was intercepted in India(See Appendix). In Shanghai, Shastri played a pivotal role in the Branch of Theosophical Society and the Asiatic Association. Although no official British documents have yet been found, Japanese Ministry of Foreign Affairs documents suggest that he researched and reported on the nucleus of the "Universal Brotherhood of Humanity," including Sun Yat-sen, Rabindranath Tagore, Vasiliy Yakovlevich Eroshenko, and communists. Considering that Besant Girl's School in Shanghai was not political but Besant strongly supported the Home Rule of India, the school would have been perfect for Shastri to decolorize the President of Theosophical Society's advocacy of Indian autonomy and shift focus on female education.

Shastri moved to Britain in 1929. In the turbulent era when Pan-Asianism often meant Japanese-led hegemony in the East, immigration would have been almost impossible if he would not have served as Agent P. His self-appointed mission to spread yoga, however, was nearly a yogi's penance. Several newspaper advertisements indicate

that he performed sideshow acts, such as clairvoyance. He even offered information to the Japanese legation in London in 1933 but failed because he had been considered as merely an “information broker” regularly in contact with the British government. According to Shastri, Berlin was “the head quarter of the connection between the Japan communists and Moscow” and “a strong centre for propaganda and work in Japan” aiming at “revolution” had been formed under Agnes Smedley, Pro-Indian revolutionary and left-wing journalist in Shanghai. The potential information about Smedley’s lover Richard Sorge building communist spy network and their mutual informer Hotsumi Ozaki, therefore, did not attract any serious attention, and it took years for the web of his lies across Asia to cover his past.